

総 説

3. 鳥, ブタ, そしてパンデミックインフルエンザ騒動を振り返る

喜 田 宏

北海道大学大学院獣医学研究科教授
同大人獣共通感染症リサーチセンター長

“鳥インフルエンザ”, “ブタインフルエンザ”, そして“新型インフルエンザ”はいずれも, ヒトの病名ではない. すべて「インフルエンザ」である. 日本だけで毎年数千名を死亡させ, 数百名の小児に脳症を起こしている季節性インフルエンザの克服こそが, パンデミックインフルエンザ対策の基盤である.

はじめに

本誌編集委員会から, <総説>「鳥インフルエンザ, 豚インフルエンザの現状と課題」の原稿依頼があった. その心は, 「パンデミックインフルエンザウイルスの出現に与る野生水禽, 家禽とブタのインフルエンザの現状を知ること, その発生と流行の予防対策に必要」との認識に基づくものと理解して本稿を認める. 筆者は40年間, インフルエンザの克服に向け, インフルエンザウイルスの生態, パンデミックウイルスと高病原性鳥インフルエンザウイルスの出現経路, ウイルスの宿主域, 抗原変異と病原性に関与する宿主因子の研究, ならびに臨床に役立つ診断キット, 治療薬およびワクチンの開発と実用化研究を推進してきた. 得られた結果に基づき, 鳥インフルエンザ対策ならびにパンデミックインフルエンザ対策を提案してきたが, 未だに日本の行政とメディアに十分な理解が得られず, 些か疲れを覚えている. ウイルス学会会員各位におかれては, 本稿を, 科学論文や総説としてではなく, 筆者の主観に基づく, 某野球監督の“ボヤキ”に近いものとして, 気楽にお目通し下されば幸いである.

用語の間違い

“鳥インフルエンザ”, “高病原性インフルエンザ”, 次の“新型インフルエンザ”のような用語の間違いと乱れが, 混乱と誤解を招いた. 感染症法にヒトの2類感染症として“鳥インフルエンザ (H5N1)”が挙げられているために, ニワトリに対して病原性が高いウイルスは, ヒトに対しても高病原性との誤解を招いた. “新型インフルエンザ”は, “Pandemic influenza”の誤訳である. 「季節性インフルエンザとは異なる, もっと怖い病気」との誤解を招いている. 「H5N1 高病原性インフルエンザ」や, 「新型インフルエンザは, 鳥インフルエンザが変異を起こしたもの」など, メディアと行政が合唱して, 一般市民を混乱に巻き込んだ. 実は, これらはすべてヒトのインフルエンザウイルス感染症であり, すなわち「インフルエンザ」である.

「毒性が高いH5N1ではなく, 季節性インフルエンザなみに毒性が低いH1N1なので, これまでの新型インフルエンザ対策を緩める」に至っては, 救い難い間違いの三重唱である. インフルエンザウイルスは毒素ではないので, 毒性はいけない. H5N1やH1N1は抗原亜型であって, ウイルスではない. 毒性ではなく, 病原性とすべきである. インフルエンザは, インフルエンザウイルスの感染に対する生体の応答であるので, いずれの宿主動物に対する病原性を示さなければ意味がない.

高病原性鳥インフルエンザウイルス

H5N1 高病原性鳥インフルエンザウイルスによる家禽と野生水禽の被害が, ユーラシアとアフリカの62カ国に拡がった. 内15カ国では, 6年間に, 計498名のヒトがこのウイルスに感染し, 6割が死亡した (2010年5月6日現在).

連絡先

〒060-0818
札幌市北区北18条西9丁目
北海道大学大学院獣医学研究科
TEL: 011-706-5207
FAX: 011-706-5273
E-mail: kida@vetmed.hokudai.ac.jp

中国、ベトナム、インドネシアと、2006年からはエジプトが、家禽に不活化ワクチンを接種して、鳥インフルエンザ制圧対策の基本である摘発淘汰を怠ったために、H5N1ウイルスが10年以上も感染を拡大し、抗原変異まで起こしたのである。さらに、これら4カ国で、ヒトのH5N1ウイルス感染例数の87%を占める事実は、一刻も早く、鳥インフルエンザの被害を家禽だけで終らせることがパンデミック対策の要でもあることを示している。

斯かる背景の下で、H5N1鳥インフルエンザウイルスがヒトにおける伝播能と病原性を獲得してパンデミックを起こすのは、秒読み段階との妄想の下に対策が執られた。日本では、プレパンデミックワクチンと称して、不活化H5N1ウイルス完全粒子に水酸化アルミニウムゲルをアジュバントとして加えたワクチンを成人のみならず、3歳以下の幼児を含む6,000人余に接種する臨床試験が実施された。これに驚いた外国の識者から「日本は何故このように膨大な無駄遣いとなる暴挙に走るのか」との抗議や質問が寄せられ、返答に困ったものである。

鳥インフルエンザとパンデミックインフルエンザ対策

鳥インフルエンザ対策の基本は、まず、「感染家禽の摘発、淘汰により、被害を最小限に食い止めるとともにヒトの健康と食の安全を守る。鳥インフルエンザウイルスの感染を鳥だけに止める」ことである。次に、「過去のパンデミックウイルスの出現にブタが関与したことには疑いがないので、ブタインフルエンザの疫学調査を、特に鳥インフルエンザの多発地である中国、東南アジア、北・中米で継続実施する」ことである。2004年以来、これらをOIE（国際獣疫事務局）、WHOと各国に提案してきた結果、本年になってようやく一部がOIEの鳥インフルエンザ対策の指針に記述されることとなった。残念ながら、WHO、わが国の厚生労働省と多くの所謂専門家は、未だに、「H5N1鳥インフルエンザウイルスはヒトに対しても“高毒性”で、これがパンデミックウイルスの本命」と“警告”し、H5N1ウイルスワクチンの再製造と備蓄を推奨している。

ブタ由来 H1N1 パンデミックインフルエンザウイルス

昨年4月、メキシコで、ブタ由来H1N1インフルエンザウイルスがヒトに伝播して、米国にその感染が拡大していることがわかった。WHOは6月に、パンデミックの段階に至ったと宣言した。日本では、これを「新型インフルエンザ」と呼び、流行防止を図ろうとしたが、対策に一貫性は見られなかった。そもそもブタのウイルスがヒトに伝播

してすぐに、ヒトに高い病原性を示すことはない。鳥インフルエンザウイルスも同じである。インフルエンザウイルスの病原性は、感染した宿主体内における増殖の速さと量によって決まるからである。これがヒトからヒトに感染伝播を繰り返すうちに、ヒトでよく増殖する子孫ウイルスが選択される結果、ヒトに対して高い病原性を示すのである。したがって、パンデミックの第二波を起こすウイルスの病原性が高いのは“謎”ではなく、当たり前である。アジア/57 (H2N2) 新型インフルエンザウイルスは5月に日本で最初の流行を起こし、香港/68 (H3N2) 新型ウイルスは9月に登場した。何れもその後、冬に季節性インフルエンザを起こしている。第二波はすなわち、季節性インフルエンザである。季節性インフルエンザウイルスこそ病原性が高いのである。現に、この度のブタ由来H1N1パンデミックウイルスは、出現してから1年間に、214カ国に感染が広がったが、確認された死亡者は18,001名（5月2日現在）に止まり、季節性インフルエンザによるそれよりはるかに少ない。日本でも数千万人がこのウイルスに不顕性感染したものと推察する。

季節性インフルエンザこそ恐るべき

日本だけで毎年数千名以上を死亡させ、数百名以上に脳症、多臓器不全を起こしている、季節性インフルエンザウイルスこそ、恐るべき相手なのである。季節性インフルエンザ対策を放置して、新型、新型と大騒ぎするのは見当違いである。日本政府は、一千億円超を投じてこのブタ由来H1N1ウイルスワクチンを一億ドースも国外企業から輸入するという途方もない契約を交わしてしまった。これまで日本の季節性ワクチンの年度毎の総接種量でさえ、三千万ドースを超えたことはない。輸入品のほとんどが使われずに廃棄されるであろう。

おわりに

インフルエンザのような人獣共通感染症については、自然界から人間社会に至る病因微生物の生態、伝播経路、感染と宿主生体の応答としての発症、免疫と宿主集団の疫学をトータルで捉えて、対策に活かす視点が欠かせない。昨今のインフルエンザ騒動は、斯かる姿勢が定まらない、所謂専門家、行政とメディアの誤解と妄想に基づく大合唱によって引き起こされたものである。感染症の本質を踏まえた、筋の通った情報発信が欠けていた。危機管理とは一般市民に安全・安心を齎すための方策であって、徒に危機感を煽ることではない。

Looking back upon the confusion of avian, swine, and pandemic influenza

Hiroshi KIDA

Professor, The Graduate School of Veterinary Medicine
Director, The Research Center for Zoonosis Control
Hokkaido University
E-mail: kida@vetmed.hokudai.ac.jp

“Avian influenza”, “swine influenza”, and “new influenza” are not the names of disease but “influenza” in humans. The preparedness for pandemic influenza should be based on the measures how to control the seasonal influenza that causes thousands of deaths and hundreds of encephalopathy every year in Japan.

